

【背景と目的】沙流川流域にシマフクロウの生息環境を再生する

北海道森林管理局長、平取町長、平取アイヌ協会長による三者協定「21世紀・アイヌ文化伝承の森再生計画 - コタンコロカムイの森づくり推進のための協定書 -」（平成25年締結）に基づき、平取町内の国有林野では国有林と地域の「協働と連携」によるアイヌ文化振興のプロジェクトが展開されています。

シマフクロウは、アイヌ語でコタンコロカムイ（集落を司る神）とされ、アイヌ文化を育んできた北海道古来の森林や河川を再生する象徴となっています。現在、日高地方は同種の生息地域の西端に位置し、当署では、当該プロジェクトと保護増殖事業の一環として、沙流川流域における生息環境を再生する取組を実施しており、その重要な柱の一つが、主食である魚類の生息（移動、遡上、繁殖等）環境の改善です。

そのために、当署は上流側の国有林野内にある治山ダムに魚道を設置し、町から事業を受託している（株）アイヌ文化振興公社（以下「振興公社」）は下流側の農業用頭首工に木製の簡易魚道（市民魚道）を設置して支流単位で取組を進めており、本発表では、令和6年度にアベツ川の谷止工に設置した引込式石積魚道を中心に報告します。



【フィールドの概要】アベツ川ってどんな川？

(1) アベツ川

アベツ川は沙流川の下流部で合流する支流で、上流の国有林には、アイヌ文化振興に係る多様な活動が行われている「アベツの森」があります。

この川にも治山ダムや複数の頭首工が設置され魚類の遡上の障害となっています。

サクラマスなど「森と海をつなぐ」回遊魚が、この森まで遡上できるよう、令和6年度には上流部の既設治山ダム（S60谷止工）に、当署が引込式石積魚道を設置し、令和7年度には下流にある小平第1頭首工に、振興公社が市民魚道を設置しました。市民魚道の設置には当署も参加しました。

(2) 改良前の状況

魚道設置前は、治山ダムより上流で確認できたのは、残留個体群であるハナカジカとフクドジョウのみで、ヤマメ（サクラマスの残留個体）とアメマスは治山ダムより下流でしか確認できませんでした。また、下流にある頭首工群は大規模増水時にはサクラマス等が遡上することもありましたが、平水時の遡上は困難な状況でした。



【取組の成果】魚道設置の効果と今後の課題

(1) 魚道の設置状況



(2) 魚道の設置効果

魚道通水直後の令和6年9月には、魚道から約1.7km上流へのヤマメとアメマスの遡上を確認しました。

令和7年9月には、第1頭首工への市民魚道設置効果と偶発的増水が重なり、サクラマスが魚道の上流側まで遡上し、40年ぶりの産卵が確認されました。

さらに、魚道を通じて上流側から適量の土砂が供給されることで、岩盤が露出していた下流側の河床の砂礫が再生し、産卵床の形成に資する効果も現れています。

(3) 今後の課題

流水の営力により魚道下部とプール間の段差が拡大しつつあり、今後、魚類の遡上に影響がないかモニタリングの継続が必要です。また、平水時の遡上が可能となるよう、下流側の未改良の頭首工の早期の改良が求められます。

【展望】シマフクロウが自然状態で安定的に生息できる環境の再生に向けて

令和7年度には、沙流川支流の仁世宇水系においても、治山ダムへの魚道設置工事（チマルラの沢）及び魚道設置に向けた調査設計（シュータの沢）を実施しました。沙流川水系のうち水量が豊富な支流は、今後の取組によってサクラマスなどの遡上が期待できます。一時期は生息数が減少していたシマフクロウが自然状態で安定的に生息できる環境を再生するためには、これまでに実施してきた河畔林等の保全や巣箱設置等も継続しつつ、流域・地域ぐるみでの連携体制づくりや取組の継続が求められます。

特に、魚類の生息環境の改善については多くの関係機関や事業者等との連携が重要です。様々な情報発信を通じて取組の目標や課題等を共有し、地域社会の幅広い理解と支持を得るべく取り組んでいきます。